

中国語書き言葉における「文」論序説

橋 本 陽 介

0. はじめに

書き言葉において、「一つの文」なるものを、句点から句点までの単位と考えると、中国語におけるそれは、英語などと比較して特殊であるように思われることがある。中でも問題となるのが、長くて複雑な「文」である。

(1) 你坐的是长途公共汽车，那破旧的车子，城市里淘汰下来的，在保养的极差的山区公路上，路面到处坑坑洼洼，从早起颠簸了十二个小时，来到这座南方山区的小县城。

おまえが乗ったのは長距離バスだった。都会でお払い箱になったボンコツ車が、補修の行き届いていない山道を走る。路面はデコボコだらけ。朝から十二時間揺られ続けて、ようやくこの南方の山間の県城に着いた。

The old bus is a city reject. After shaking in it for twelve hours on the potholed highway since early morning, you arrive in this mountain county town in the South.

(高行健“灵山”、飯塚容訳、translated by Mabel Lee)

句点から句点までを「一つの文」とするならば、(1) の中国語は「一つの文」である。しかしこの文を日本語や英語などに「一つの文」として翻訳するのは難しい。このため、飯塚容による日本語訳は四つの文、Mabel Leeによる英語訳は二つの文に翻訳しているし、「従属節＋主節」の構造にしている。

このように、中国語書き言葉の「一つの文」(句点から句点まで)の構成は日本語や英語その他の言語と相当に異なっている。他の言語の観点から見ると、いったいなぜ句点で切らずに続けられるのか、よくわからないことも少なくない。さらには、読点でつなげても、句点で区切っても、どちらでもいいケースも多くある。いったいなぜそのようなことが起きるのだろうか。これは単に中国語における句読点の歴史が浅く、用法が安定していないからではないように思われる。一定の規則に従って「一つの文」を作っているように思われるのである。

もし中国語書き言葉においてどのような規則にのっとって「一つの文」なるまとまりを作っているかが明らかになったならば、中国語で書く場合の「一つの文」の観念がわかることになるだろう。そしてそれが英語や日本語などと異なっているとすれば、それはどのようにしてなのかが明らかになるだろう。これが明らかになれば、人間言語において「文」とは何かを考える上でも、これまでにはなかった見方を提供できることにつながるだろう。

本稿は、中国語書き言葉(特に小説言語)における「文」とは何かを巡る研究の序説である。これまで、この問題はほとんど考えられたことがなかった。そこで最初に問題となる対象領域を策定し、その方法、

目的、考え方を明らかにしなければならない。即ち本稿は論者による今後の研究の序説ともなるものである。

1. 小説言語と言語学研究

現代において言語研究と文学研究は分断されている。小説や詩などの文学作品は言語でできているにもかかわらず、その言語分析に現代言語学の成果はあまり取り入れられていない。ほとんどの文学研究者は、そもそも言語学の理論を参照にもしていないのである。一方、言語学のほうでも、文学言語は周辺のものにされている。その中で、橋本（2014）では、小説言語の言語使用を対象とし、主に時間の表し方と話法について詳細に論じた。例えば小説文の文末はタ形とル形が入り混じるが、無規則に使われているわけではなく、法則があることを明らかにした。それまで、小説文のタ形とル形の使用が日常言語のそれとどのように違うか、明らかにされていなかったのは、そもそもほとんど研究されていなかったからである。もちろん工藤（1995）ほか若干の研究はあったが、橋本（2014）で詳しく見たとおり、それまでの先行研究では小説のタ形とル形は「修辭的で特殊」とされ、例外として考察の外に置くものがほとんどだったのである。

現代言語学で小説言語に焦点を絞り、かつその特徴を別の言語使用と比較する研究は少ない。そもそもそれを例外的で言語学の理論からはみ出すと意識的にも無意識的にも考える言語学者が多い。その理由は複数考えられるが、第一に音声中心主義的思考が挙げられる。書き言葉、なかでも高度に修辭的な文学言語はこの思考のもとでは例外的なものになってしまう（ただし本当の意味での話し言葉を対象とした研究は、実のところそれほど行われてきたわけではない。対象とされてきたのは「書かれた話し言葉」である）。第二に、言語学の主流は、「文」を対象としてきた。「文」を超える単位の研究は、テキスト言語学など少数あるが、極めて限定されているし、そのテキスト言語学も「文」を基本的な単位としているものが多い。文学言語を扱うのに、「文」を最大単位とするのでは不十分であろう。認知言語学では、メタファーなど文学的な要素も取り扱われているが、語彙レベル、構文レベルを超えるものは少ない。

第三に、現代言語学の主流は形式主義であることが挙げられる。形式主義的統語論では、「解釈」を排除しようとする。中国語学の領域でもこの点は顕著に認められ、解釈を介在させない操作、言語テストなどがよく行われている。解釈を排除しようとするれば、文学的な文章は扱うことが難しくなるし、扱う範囲が比較的単純にならざるをえない。また意味論が扱う「意味」やその「解釈」も、基本的には形式と現実世界との対応関係であり、修辭的な意味解釈ではない。文学的言語では、意味論的には同じことを述べていても、何かが違っているように感じられることがある。それはいったいどのような仕組みか。もちろん語用論等でもそれは記述されるが、文学や文体論で扱う範囲を取り込むと、拡大する領域はさらに広がるだろう。

また、小説言語や文体論で扱うような表現は個別的・具体的なもののみなされることも要因となる。言語学では一般理論が目指され、個別的な表れでは「理論」になっていないと見なされる。

以上、いくつかの要因を考えたが、少なくとも言語学の諸分野において文学言語・修辭的文章が周辺の位置に置かれていることは確かである。だが、本稿では言語学の諸分野がそれを対象領域に含める価値を有すると考える。

言語は生得的と言われるが、音声言語ではこれは正しい。しかし書き言葉は完全に生得的とは言えない。ある程度、学習する必要がある。これは、書き言葉は歴史的かつ文化的にも人工的に彫琢されてきているからである。言語学が言語についての「学」である以上、歴史的・文化的彫琢されているものが、それ以外の言語使用とどう異なるのかも考える必要がある。第二に、「文」で終わるのではなく「文章」、非形式

主義的解釈、修辭的レベル・個人的文体差のレベルを「特殊」として排除するのではなく、むしろ積極的に取り入れるべきである。なぜなら私たちは修辭的な書き言葉を用いているのであり、その用い方によって読み手の感触も異なるし、単独の「文」を使っているのではなく「文章」を使っているからである。

完全なる話し言葉（会話で使用している生の話し言葉）を一方の極とすると、小説や詩などの文学言語はもう一方の極である。会話で使用している生の話し言葉は、「話し言葉を書いたもの」とは異なるが、「完全なる話し言葉」の「文」の研究は、必ずしも主流を占めているわけではない。もう一方の極、書き言葉、中でも文学言語の言語学的研究はさらに少ない。

ロシアのフォルマリズムなどは、文学などの「詩的言語」などは日常言語と異なる体系であるとした。橋本（2014）では、小説言語をその他のジャンルの言語使用と比較の上で明らかにしたが、完全に異なる体系であるとは考えていない。話し言葉から、小説などの文学言語までの間は連続的であり、つながっていると考えられる。「一方の極と一方の極」としたのは、その意味である。言語学は完全なる話し言葉も対象とするべきであるし、極度に修辭的な書き言葉までもその射程にとらえるべきである。

2. 言語学と文学の接点

本研究が序説とする「文」論は、書き言葉の文法論であり、修辭論である。その関心を概念的に表してみよう。

人間は世界を言語化するが、その際に認知的な基盤に従って言語化している。そしてこの認知的な基盤は文化によって異ならず、人類に共通であると思われる。こうして表層上の言語ができるが、人間の認知基盤はかなりの部分で言語・文化を超える共通性を持っており、表層言語（話し言葉）も形式・意味ともかなりの部分で共通性を示す。共通性があるからこそ翻訳が可能であり、また母語以外の言語の習得も後天的に可能になっていると考えられる。

話し言葉は、すでに現実を抽象化したものであるが、書き言葉ではそれをさらに抽象化する。また、現

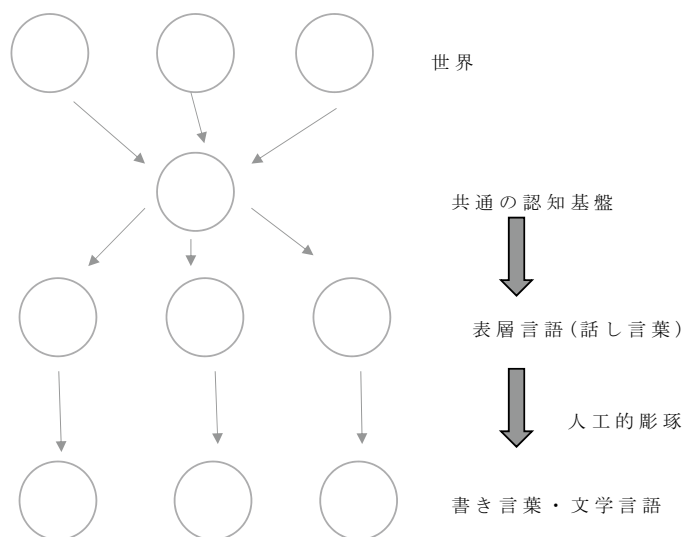


図1 言語化のプロセス

実の「いま・ここ」が定まっている会話文とは異なり、書き言葉では書き手が向きあうのは紙とペン、あるいはパソコンやスマートフォンである。紙の上に印刷されたり、画面上に記された文章は、自分で書いたものであっても客観の対象物として目の間におかれる。目の前に置かれた客観の対象物は、人工的に彫琢することが可能である。このため文章語は、無駄が省かれ、矛盾が取り除かれ、規範化され、整ったものになっていく。音声中心主義的思考では、話し言葉こそ言語の基礎であると考えられるが、見方を変えれば人工的に整えられた書き言葉のほうが、不純物を取り除かれた「理想的な言語」である。多くの理論では「音声中心主義」と言いながら、「理想的な言語」を標準とみなしている。

チョムスキーらが明らかにしたことに従えば、言語は生得的なものであり、人間の子供であれば通常誰でも言葉を読めるようになる。しかし文章語は必ずしもそうではない。ネイティブスピーカーであっても、規範化され、整った文章は人工的に学ぶ必要がある。中でも文学言語は、単に主張を述べたり、世界を叙述したりするためだけのものではない。読者を感動させたり、怒らせたり、悲しませたり、楽しめたりしようとする。言語の使い方次第では感動するものも感動しなくなり、面白いものでも面白く感じなくなる。作家たちは人工的に言語に工夫をこらそうとする。

工夫をこらそうとするものではあるが、あくまでも既成のコード（話し言葉から人工的に彫琢されたもの）に従わなくてはならない。もちろん言語は固定されたものではないから、創造によって書き言葉のコードも変化をこうむる。書き言葉は規範化されたものなので、話し言葉よりも変化に対する抵抗は大きい。抵抗を受けつつも緩やかに変化していく。人工的に彫琢されるものなので、何らかの要因によって大きく変化を被ることもある。日本の明治初期や中国の民国期など、特に大きな変化をこうむった時期はその歴史的変化を見て取りやすい。

人間言語には言語を超えた共通性・一般性があるが、一方で、コード化して表層言語にする際に、少なくとも表面上の違いは出る。人工的に彫琢された文学言語では、特にこの違いが大きくなる。

言語学が主に行っているのは、先に図示した通り、言語がいかに関世界をコード化しているかである。また、そのコード化された形式が何を意味しているかを問うが、文学的・修辭的な解釈が行われることは少ない。一方、文学研究者が主に行っているのは、すでにコード化されたものを解釈することであり、いかなる仕方でコード化しているかという問題は、ほとんど考えられていない。本研究が目指す研究は、この両者をつなぐことである。文学言語（本書では小説言語）がどのような仕方でコード化されているのか、その仕組みを問題とする。さらにその仕組みが、解釈にどのような影響を及ぼすのかを考える。

3. 「比較詩学」の考え方

本研究では、主に中国語の「文」について研究するが、その問題意識からスタートして、日本語や英語とも対照させる。これは、橋本（2014）で言う「比較詩学」の考え方に基づく。橋本（2014：20）では「比較詩学」について「本稿で議論する『物語の比較詩学』の理論とは、テキスト言語学的な見地に基づき、個別言語における物語の言語使用を比較、分析することによって、その言語を使用して物語の際の言語意識を明らかにし、ひいては現行の物語論の理論自体も日本語や中国語といった立場から更新しようとする試みである」とした。「その言語を使用して物語の際の言語意識」と述べているとおり、「比較詩学」では、使用する言語がある程度表現を規定すると考える。

サピア・ウォーフの仮説以来、言語と思考の関係があるかどうか問題となってきた。その後、ウォーフの論には問題点が多いとされているし、言語が思考を完全に規定するとする考えには、異論が多い。言

語が思考を完全に規定するとするなら、外国語を理解することは不可能になるはずである。「青」と「緑」を区別しない言語は多いが、そうした言語を使用する人に、私たちが「青」と呼んでいる色と、「緑」と読んでいる色の区別がつかないわけではない。

しかし、言語は表現を規定する。「青」と「緑」を表現しわけない言語であっても、必要があれば別の言い方をするなり、より詳しく表現したりするだろうが、そうでなければ、同じ表現となる。こうした言語習慣を持つ人たちにとっては、特に表現し分ける必要性を感じないかもしれない。これは語彙レベルの話であるが、文法レベルでも個別言語ごとに表現をある程度規定する。よく知られた先駆的研究としては、池上（1981）が挙げられる。池上（1981）は、英語などの言語を「する」言語、日本語のような言語を「なる」言語と呼び、両者の表現の違いを明らかにしている。言語以前の世界把握の仕方は、異なる言語を使用する人の間で異なっている可能性は低いが、その把握した事象をどのように表現するかはある程度言語によって規定されているのである。こうした研究は、認知言語学、認知類型論などの分野で行われてきている（例えば堀江・パルデシ（2009））。

橋本（2014）では、時間と語法の文法的違いを明らかにした。その結果、日本語や中国語では英語などの言語と時間の表し方や視点の取り方がそれぞれ異なってくることがわかった。日本語で書く場合には、日本語の言語習慣に縛られるし、中国語で書く場合には中国語の言語習慣に縛られる。翻訳すると、「何かが失われている」感じがしたり、「読んだ感触が違う」感じがしたりすることがあるが、これはコード化の仕方が個別言語によって違うので、一対一で対応するように翻訳できないからである。繰り返しになるが、これは言語が思考を決定づけるというわけではない。翻訳によって「何かが失われている」と感じられるのは、これは元の言語と翻訳後の言語を両方解読できているからであり、母語のほうに完全に規定されているわけではないからである。日本語で書く場合、日本語の時間表出の仕方や語法の表し方に無意識的に従っており、他の言語と比較しなければ、他の言語ではその表し方の習慣に違いがあることはわからない。

今、翻訳すると「何かが失われている」感じがしたり、「読んだ感触が違う」感じがしたりすることがある」とした。これは、その文を解釈した際に生じる感覚である。何らかのレベルにおいて解釈の仕方も規定されてしまうからである。言語間の対象という点では、対照言語学が挙げられるが、修辭的操作が加えられたものの対照は暗黙裏に除外されている。これでは、文学言語の翻訳などは扱うことができない。

4. 「文」とは何か

さてここまで、本研究が前提とする方針、考え方を明らかにしてきた。このようなコンセプトを前提として、追及するテーマは何か。それは中国語の書き言葉、とりわけ小説言語における「文」とは何かを探求することである。さらにそこから、言語における「文」とは何かについて考察していく。

言語学は「文」を最大の単位とするとしたが、実際のところ「文」とは何だろうか。大木（2017：5-6）は「近年の文法論においては、文という単位体は自明のものとして、文がいかなるものであるかということ厳密に考えたり、単位体としての文を規定しようとしている研究は少ない」とする。大木（2017）の言う通り、「文」とは自明のようでいて、それは何かということになると、簡単には答えられない。最も伝統的な考え方に従えば、それは主語と述語が一つずつそろったものであったが、橋本（1948）はその外形上の特徴として①文は音の連続である ②文の前後には必ず音の切れ目がある ③文の終には特殊の音調が加はる を挙げている。山田（1936）は、「一の句とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ」と言う。「ひとまとまり」を「統覚作用」に求めており、現代的な観点か

ら言えば人間の認知作用によってまとめられる単位が「文」になりそうである。

時枝(1950)は①具体的な思想の表現であること ②統一性があること ③完結性があること を文の要件として挙げている。時枝にとって「具体的な思想の表現」とは、よく知られている通り、詞と辞が結合したものである。詞とは客観的な表現であり、辞とは主体的な表現のことを指し、(すべてではないが)助詞・助動詞がこれに相当している。時枝にとって、辞は「文」を成立させる要件であり、それが明示されていない場合にもゼロ記号の「辞」があるとみなす。仁田(1991)、益岡(1991)などは、日本語の文を「命題」と「モダリティ」から構成されるとする。「命題」は時枝の詞に近いものであり、モダリティは辞に近いものである。大木(2017:104)は、言語行為論との関係から、「文」とは「一つの発語内目的を担っている語列が文という単位体である」とする。聞き手に対して何をするか、その目的が重要だとみなすのである。そのうえで、外形的形式としては「統語的關係が続く範囲」であると考えている。

これらを見てもわかる通り、「文」とは概ね意味としては「ひとまとまり」を表すとされ、また形式上は音声的に「切れ目」があると考えられる。ただし、「ひとまとまり」とはどのようなものかは、必ずしもはっきりしない。山田の「統覚作用」の考え方によると、それは話し手が現実を統合するあり方ということになり、そこに話し手の主体性を見て取ることができる。時枝の「辞」の考え方も、話者の主体性に焦点が当たっていた。大木(2017)の「発語内目的」では、言語を発する目的を「文」の本質とするものであるが、こちらでも聞き手に対して何をしているかが「文」にとって本質的だということになる。

では、この「文」なる規定は、先ほど述べた「完全なる話し言葉」と「文学言語」のうちの、どこの話をしているものだろうか。「書き言葉」や「文学言語」では、「音の切れ目」はない。ただし、句読点を使用することによってそれを表していると考えれば、あるにはある。だが、音の切れ目で句点を区切っているのかと言うと、むしろ句点で区切ったところでポーズを取っているようにも思われる。また、モダリティ論や言語行為論、発話内目的では聞き手に対する作用が重視されているが、話し言葉を観察する限り、確かに私たちは聞き手に対して、何か目的をもって発話をしているように見える。単に知っていることを伝えるだけでなく、新たに発見した事態を表すこともあるし、相手にしてほしいことを伝えたり、自分のしたいことを伝えたりしている。

だが、書き言葉では話し手と聞き手が時空間を共にしていない。特に小説言語が、何かを要求したり、自分のしたいことを伝えたりすることは少なく、ほとんどはそこで起こった出来事を叙述し、状態を描写するだけである。このため、話し言葉では必須に近いモダリティの類も、その使用が大幅に減少する。少なくとも会話文に比べて「対人関係」が薄くなるのは確かだし、橋本(2014)でも述べた通り、話し手と聞き手が時空間を共にする場合としない場合では文法も変わってしまう。このように考えると、書き言葉や小説言語においては、モダリティや言語行為のみを強調するわけにはいなくなる。言語学者が意識しているかはわからないが、おそらく書き言葉や小説言語よりも、話し言葉こそ言語の本質と考えて議論しているのであろう。

「完全なる話し言葉」ともこれらの「文」の考え方が一致するわけではない。まず、「音の切れ目」が「文」に対応しているかは怪しい。特に連続で話す場合、音声の切れ目は連続的になりやすく、書かれた時の句読点の使い方とは必ずしも一致しない。発話内目的を文の本質と考えとしても、それは「一つの文」で行われるとしていいだろうか。自分の知識を表明したり、その日あったことを伝えたりする場合、むしろディスコース単位でその行為を行っていると考えのほうが適切ではないだろうか。その場合、「同じ発話内目的を持った文の連続」と考えればいいとするかもしれないが、「切れ目」を考えた場合、外形的な形式のほうが結局決定的な役割を果たしていることになるのではないかという疑問が残る。「文」なるもの

は、話し言葉を純化させて作った抽象的な単位を対象として議論と考えるべきように思われる。

Chomsky (1957) は、S (文) → VP (動詞句) + NP (名詞句) とする。格文法で有名な Fillmore (1968) は、文の構成要素を法 + 助動詞 + 命題と考え、命題は主動詞 + 名詞句とする。そして、この名詞句が主動詞との関係でさまざまな格を持つと考える。さらに、Fillmore (1968) は、「文」に現れる「格」について、「動作主格、道具格、与格、作為格、場所格、対象格」に分類し、一つの文に同じ格は一つしか生じないと論じている。これは「一つのまとまり」と考えた場合、何をもって「一つのまとまり」と考えるのかという問題が生じるが、それに対する一つの見識と取ることができる。

中国語における「文」の規定については、次節以降で論じるが、おおむねここまで述べてきたものと大差はない。

このように「文」を規定しようとするのが困難が伴うが、書き言葉の場合、その認定は難しくない。書き言葉においては「文」とは句点から句点まで (ピリオドからピリオドまで) のことであり、これが通常「一つの文」とみなされるものである。句点から句点までの「文」なる単位は所与のものとして存在しており、規定しようとするならば、それがどのようなものであるかを探ることになる。

5. 中国語における文、複文、流水文

中国語の現代言語学は『馬氏文通』に始まるとされる。『馬氏文通』では、「文 (原文では“句”)」とは主語と述語を持ち、「単語が組み合わされてその意味がすでに完全になっているもの (凡字相配而辞意已全者)」とされる。『馬氏文通』ではまた、「文」に対して「読」という単位も導入されているが、こちらは主語と述語を持つものの、意味が完全ではないものとされ、概ね主述構造を持つ従属節に当たる。よく知られている通り、『馬氏文通』はラテン語文法を参照にして作られたものなので、主語と述語のあるひとまとまりの単位を「文」と考えていたことが分かる。黎錦熙 (1924) では、「文」とは「思想において一つの完全な意味を表すもの」とされた。赵元任 (1968) は「両端がポーズで限定されている話」であるとし、朱德熙 (1982) も「文とはその前後にポーズを有し、一定のイントネーションを帯び、相対的に整った意味を表す言語形式である」としている。また、邢福义 (1996) は、「文」について「小文中枢説 (“小句中枢説”)」を提出している。ここでいう「小文」とは、語や節にモダリティを加えたものと定義されている。

大きくまとめるとすれば、「ひとまとまりの意味 (もしくは思考) を表す」という意味からの定義と、「音声的にはポーズで区切られている」という音声からの定義、さらには「主語と述語を持つ」のような形式からの定義、さらにはモダリティを加えた単位からの定義が行われており、定義からすればほぼ日本語文法のそれに一致していると言っていいだろう。

本研究で特に問題とするのは、一個の主語と一個の述語、もしくは述語とモダリティからなるような比較的単純な文ではなく、複数の主語、もしくは複数の述語を持つような複雑なものである。こうした複雑な文は、「複文」として研究されてきているが、「複文」とはどのようなものとされてきているだろうか。

中国語の複文とは何かについては、長く議論の対象になってきた。黎錦熙 (1924) の十二章「単文の複成分」では、複文に当たるものとして主語が二つあるもの、目的語が二つあるものを考えている。一九五〇年代になると、単文と複文の概念について論争が起こった。代表的なものに胡附・文鍊 (1955)、孙毓麟 (1957)、郭中平 (1957) などがある (なお、この時の論争のまとめとしては龚千炎 1987 が詳しい)。五〇年代の論争で主に問題となったのは、まず埋め込み文や、使役文など、複数の主述構造が入っている文を複文とみなすかどうかである。複数の主語と述語からなるという意味では複文であるが、複文に含ま

れる二つ以上の節が比較的独立していなければならないと考える立場からすれば、これらは単文となる。日本語文法では、埋め込み文も複文として扱うのが一般的であるが、中国語の複文研究では含まれないことが現在でも多い。文成分として埋め込まれている場合、独立しているとはみなさないからである。

王細(1985)、赵恩芳・唐雪凝(1998)、邢福义(2001)などによる複文の研究では、①二つ以上の独立して使用可能な文を使用し、②その二つ以上の文が意味上の関連を持つこと、一定の論理的関係を持つことが複文の条件として挙げられていた。このような複文観に基づくのであれば、複文には「文」として独立可能なまとまりが構成要素としてまず存在していて、なおかつそれらが論理的な関係でつながっていることになる。すると、複文の分類方法もその「独立可能なまとまり」間の論理的関係に注目がいくことになる。その論理的関係とは因果、仮定、並列、逆接、順接などのことである。このため、邢福义(2001)は特に接続表現に注目した分析を行っている。論理的関係に着目するのは、日本語文法等と同様である。

もちろん、複文において論理的関係を見出すことはできるし、“虽然～但是”“一边～一边”のように呼応する表現や、接続表現も確かに少なくない。しかし、中国語の場合、それだけでは複雑な文を取り扱うことができないのではないか。このような複文分析の問題点として第一に、その相互の論理的関係性が必ずしも明確にできるわけではない点が挙げられる。大河内(1997:93)は「単独の文の連続とはちがった緊密な意味関係を求める一般的立場からすれば、中国語には複句として似つかわしくないものが多い」とし、陈平(1991:195)も、各節間の関係がよくわからない例として、次のようなものを挙げている。

(2) 他外出总带保镖，花棚里到处都是萝卜味。(彼は外出するときいつも用心棒を連れていた。花壇はどこも大根の匂いであった。)

大河内(1997)、陈平(1991)の言うように、中国語の複雑な文は、従来の論理的関係の分析ではよくわからないものが少なくない。しかし、まったく無法則に形成されているわけではなく、なんらかの規則に従っているはずである。ではそれはいったい何だろうか。

第二に、日本語や英語などの感覚から見ると、句点の区切り方が中国語は特殊のように思われる。

(3) 那辆车价钱太贵，颜色也不好，我不喜欢，也不想买。

That car is too expensive. The color is not good either. I don't like it and don't want to buy it. (王洪君・李榕2014による)

王洪君・李榕(2014)は(3)の中国語について、英語の観点からすると、あまりにも多くの情報を詰め込んでいるように見えるとする。(3)を読点でつなげて、「一つの文」にすることは中国語では普通だが、そのまま英語にした場合はそうはならないとする(ただし、この例は日本語では「その車は価格が高すぎるし、色もよくないから、私は好きではないし、買いたいと思わない」とすれば日本語にできる。前半を従属節化すればよい)。

最初に取り上げた(1)も同様である。通常のように、句点から句点までを「一つの文」とするのであれば、(1)は「一つの文」である。しかしこれを日本語や英語に「一つの文」で翻訳することは難しいため、日本語訳は四文、英語訳は二文に翻訳している。この例に代表されるように、中国語の小説文を見ると、「一つの文」、言い換えれば「句点から句点まで」の区切り方が、日本語や英語などとは異なっている

ことが少なくない。いったいこれはなぜなのだろうか。

また、(1) の句読点は、必ずしもこのように打たなければならないわけではない。例えば、“城市里淘汰下来的”でいったん切ることも可能である。このように、中国語では読点で続けても、句点で区切ってもよいケースが少なくない。王洪君・李榕（2014）によれば、次の(4)の途中にある読点をすべて取り払い、学生に標点符号をつけさせたところ、そのつけ方は人によって変わり、最も多い学生で4個、平均で2.53個の句点をつけたと言う。

(4) 曾经是历史最光辉的拳王阿里，近年来胜利以后，总是说要退休，但总未退休，结果败在初出道的史宾斯科手下，本来可以光荣退休，却想不到落下这一个下场。

(かつては歴史上もっとも光り輝いていた拳王アリだが、このところは勝利の後、常に引退したがっていた。しかし引退しないまま、デビューしたばかりのスピンクスに破れた。本来であれば栄光ある引退になるはずだったが、まさかこのような結末になるとは誰も思わなかった。)

つまり、どこからどこまでを「一つの文」とするかにについて、判断が大きくわかれてしまうと言うのである。なぜこのようなことが起きるのだろうか。一つの考え方としては、中国語では標点符号の歴史が短いため、その打ち方が定まっていないのだ、とみなすこともできる。だが、もしそう考えるにしても、なぜ定まらないのか、という疑問が出る。形式的な理由としては、中国語では後続く場合と、いったん切る場合で、形態的な違いがないという点に求められるだろう。しかし、単に形態的な違いが生じるだけでなく、区切り方によって読まれ方も異なる。単純な例で示そう。次の(5)は一つの文とされるのに対して、(6)は二つの文とされる(Chao1968:57)。

(5) 他不来。我不去。(彼は来ない。私はいかない。)

(6) 他不来，我不去。(彼が来ないなら、私はいかない。)

書かれたものとしての形式的違いは、読点を使うか句点を使うかだけである。ただこの場合には、音声的には(5)と(6)は違った形で読まれるだろうし、連結されて読まれる(6)の方は、「彼が来ないなら」のように、意味的なつながりも認められる。このため(5)が二つの文であるのに対して、(6)が一つの文であるとする点について大きな異論はないだろう。これは単純な例だが、中国語の文は実際にはより長く、より複雑になっている。

また、読点でも句点でもよいことが多い理由の一つは中国語が従属節を取りにくい言語である点にも求められる。中国語での複文の定義は、おおむね「二つ以上の比較的独立した節」からなるものとされていた。日本語や英語の複文分析では、複文は従属節と主節からなるとされる。従属節は、それだけでは独立して用いられないものと通常は考えられる。ところが、中国語では独立して用いられる節が連結されて複文になっている。それぞれを独立して用いることができるために、句点でも読点でもよいということが起こる。

呂叔湘(1979)は中国語では「一つの節小句に次の節が続くが、多くのところではそこで終わりにしてもいいし、続けてもいい」とし、(1)や(4)のような文を「流水文」と命名した。本研究で扱うような複雑な「文」は、その多くが「流水文」的特徴を持っている。では、流水文とはいかなるものなのだろうか。

6. 流水文の先行研究と連続構造

流水文の主な先行研究としては、胡明扬・劲松（1989）、吴竟存・梁伯枢（1992）、沈家煊（2012）、王洪君・李榕（2014）、王文斌・赵朝永（2017）などが挙げられる。まとめて言えば流水文とは、多くの節からなる複雑な複文であり、その節と節の結びつきが比較的弱く、接続表現なども用いず、たいていの場合多くの主語を持つものとされる。流水文の形式的分析・分類としては吴竟存・梁伯枢（1992：316－351）が詳しいが、その分類方法は主語と述語を中心とした文成分に注目したものである。また、各節の間の論理的関係を分析しており、一般的な複文の研究方法に類似している。

だが、このような形式的分析では、中国語の「文」がどのように構成されているかについて、明らかにすることが多いように思われる。中国語の書き言葉では節を続けてもいいし、終わりにしてもいいが、果たしてそれはなぜなのか。また、区切り方が英語や日本語と異なるが、どのような仕組みで区切られているのが明らかになっていない。これを明らかにするためには、主語や述語、その他統語論的關係と合わせ、意味的な側面にも着目する必要があるだろう。つまり、各節間の意味的な連関が弱いとされているが、どのような関連性に則って結びついているのだろうか。

中国語の書き言葉における「文」のあり方を考える上で、重要になってくると思われるのが、Givón（1997）の言う連続構造である。Givón（1997）は、文法的複雑さを得る手段として、「うめこみ」と「連続」の二種類があるとする。中国語は従属節を取りにくい言語であり、「うめこみ」の手段が取られにくく、逆にいくつもの動詞句が連なる構造や、修飾語が埋め込まれずに比較的独立した資格で節をなす中国語は典型的な「連続」の言語である。

次に、以下のような埋め込み構造と連続構造の対比を見てみよう。

(7) 一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的手的吉卜赛人，自称叫墨尔基阿德，他把那玩意儿说成是马其顿的炼金术士们创造的第八奇迹，并当众做了一次惊人的表演。（黄锦炎訳）

(8) 一个身形肥大的吉卜赛人，胡须蓬乱，手如雀爪，自称梅尔基亚德斯，当众进行了一场可惊可怖的展示，号称是出自马其顿诸位炼金大师之手手的第八大奇迹。（范哗訳）

（手が雀の足のようにはっそりした髭つつらの大男で、メルキアデスを名のるジプシーが、その言葉を信じるならば、マケドニアの発明な錬金術師の手になる世にも不思議なしろものを、実に荒っぽいやりくちで披露した。）（鼓直訳）

(7) と (8) は共にガルシア＝マルケス『百年の孤独』の同一箇所を異なる訳者が中国語訳したものであるが、処理の仕方が異なっている。(7) は埋め込み構造に翻訳しており、“一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的手的”が“吉卜赛人”に連体修飾語としてかかっているため、全体として“吉卜赛人”を主語とする動詞句になっている。一方、(8) ではまず“一个身形肥大的吉卜赛人”と主語を出した上で、その形容が“胡须蓬乱，手如雀爪，”と連続し、さらに動詞句が連続している。日本語訳を見ると、両中国語訳が埋め込みにしていない部分「メルキアデスを名のる」まで連体修飾語にしているのがわかる。このように、中国語の連続構造では、主語が提示された後、その主語の描写が連続し、さらにその主語の動作が連続する構造を取ることがよくある。

このように、中国語の書き言葉では、動詞句、名詞句、形容詞句などが、比較的独立した形で連続的に

付加されていくことが多い。この際、意味的に隣接する観念が順番に並んでいく。このため、流れるように叙述が展開しているように感じられる。

こうした文では、叙述が流れるように展開しているため、「流水文」という名称は、的を射たものである。しかし、実際のところどの程度連続したならばから「流水文」という名称で呼ぶべきかあいまいである。つまり、流水文とは、連続構造のうち比較的複雑なもののことであるが、どの程度複雑であるかははっきりしない。単純な構造に次々に節が付加される形で複雑化していくものと考えられるので、「流水文」とはそのうちある程度複雑になったものと考えることができる。本研究が取り扱うのは、主にこの連続構造によって長くなった文である。

7. まとめ

以上、本研究がその序とすところの研究の前提条件について整理してきた。本研究では、言語学において書き言葉の中でも特に「特殊な」ものとされてきている小説言語を対象とする研究である。句点から句点までを「一つの文」とするならば、中国語の小説言語では次のような特徴がある。①欧米言語や日本語では「一文」にできないものが読点でつながってってしまう ②読点でも句点でもよい場合が多い ③複文の論理的関係がよくわからない ④従属節が比較的独立している。

以上のような特徴は、中国語が埋め込み構造よりも連続構造を好む言語であり、それを前提として書き言葉を発展させてきたことにその謎を解く鍵があると思われる。また、「句点から句点まで」がどのように構成されているか、よくわからなかったのは、欧米言語や日本語の「複文」の研究と同じ尺度で考えるからである。実は中国語も、不規則にそれを作っているのではなく、どのような単位を「一つの文」としているのかは、一定の規則が存在している。それは何かを明らかにする。

また、本研究で扱っていくほとんどの文は「流水文」と言われた。「流水文」は形式的に厳密に定義されたものではなく、多分に印象から名付けられたものであるが、確かに「流れる水のように」感じられることが少なくない。なぜ、「流れる水のように」感じられるのだろうか。これは修辞の問題である。中国語の小説文では、その連続構造を発展させていく過程で、修辞的な構造も作り出してきたと考えられる。それは何だろうか。

中国語の「文」なるものは、これまでの言語学で用いられてきた「論理」ではよくわからない面があった。しかし、中国語の内部構造に従って分析を進めると、異なる合理的な構成をしていることがわかってくる。翻って、日本語などの書き言葉における「文」なるものの構成も、これまでとは異なった見方が可能になる。順次、明らかにしていく。

例文の出典

高行健《灵山》天地图书，2000年（飯塚容訳『靈山』集英社，2003年，Soul Mountain translated by Mabel Lee, Flamingo, 2001）

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』鼓直訳，新潮社，1999年（范晔译『百年孤独』南海出版社，2011年，黄锦炎，百年孤独 漓江出版社，2003年）

引用文献

(日本語文献)

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 大木一夫 (2017) 『文論序説』ひつじ書房
- 大河内康憲(1997)「複句における分句の連接関係」『中国語の諸相』白帝社
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ房
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称 (日本語研究叢書 第1期第4巻)』ひつじ書房
- 仁田義雄編 (1995) 『複文の研究 (上) (下)』くろしお出版
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』(橋本進吉著作集第二冊) 岩波書店
- 橋本陽介 (2014) 『物語における時間と話法の比較詩学—日本語と中国語からのナラトロジー』水声社
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー』研究社
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館出版

(中国語文献)

- 陈平 (1991) 《现代语言学研究：理论・方法与事实》重庆出版社
- 龚千炎 (1987) 《中国语法学史稿》语文出版社 (『中国語文法学史稿』鳥居克之訳、関西大学出版部、1991年)
- 郭中平 (1957) 《单句复句的划界问题》《中国语文》第4期
- 胡附・文鍊 (1955) 《现代汉语语法探索》东方书店出版社
- 胡明扬・劲松 (1989) 《流水句初探》《语言教学与研究》第4期
- 黎锦熙 (1924) 《新著国语文法》商务印书馆 (『新著国语文法』商务印书馆、1992年)
- 吕叔湘 (1979) 《汉语语法分析问题》商务印书馆
- 沈家煊 (2012) 《“零句”和“流水句”—为赵元任先生诞辰120周年而作》《中国语文》第5期
- 孙毓蘊 (1957) 《复合句和停顿》《中国语文》第1期
- 王洪君・李榕 (2014) 《论汉语语篇的基本单位和流水句的成因》《语言学论丛》商务印书馆
- 王文斌・赵朝永 (2017) 《汉语流水句的分类研究》《当代修辞学》第1期
- 王绶 (1985) 《复句・句群・篇章》陕西人民出版社
- 吴竞存・梁伯枢 (1992) 《现代汉语句法结构与分析》语文出版社
- 邢福义 (1996) 《汉语语法学》东北师范大学出版社
- 邢福义 (2001) 《汉语复句研究》商务印书馆
- 赵恩芳・唐雪凝 (1998) 《现代汉语复句研究》山东教育出版社
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆 (『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説』杉村博文・木村英樹訳、白帝社、1995年)

(英語文献)

- Chao, yuanren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*, University of California Press.
- Chomsky(1957) *Syntactic structures*, The Hague. (『統辞構造論』福井直樹、辻子美保子訳、岩波文庫、2014年)
- Fillmore(1968) *The Case for Case, In Universals in Linguistic Theory*, Holt, Rinehart, and Winston (『格文法の原理』田中春美・船城道雄訳、三省堂、1975年)
- Givón, T (1997) *Grammatical Relations : a functionalist perspective*, John Benjamins Publishing company.